アリソン・アンド・ピーター・スミッソンの建築作品における架構表現
アリソン・アンド・ピーター・スミッソンの建築作品に関する研究(4)

スミッソン 架構 空間構成
ヴォリューム 配列 周辺要素

1. 序 イギリス人建築家アリソン・スミッソン（1928-1993年）とピーター・スミッソン（1923-2003年）は、CIAM(近代建築国際会議)の解体とともにチーム10を設立し(1956年)、建築の周辺環境や、都市の成長と変化などの都市論を主張した。こうした都市論に基づく彼らの作品の空間構成について、筆者らは既報(1,2)において、棟(パヴィリオン)と通路(ルート)の構成による外部環境のデザイン等について報告した。こうした都市論の一方で、彼らは近代建築の形式化した表現に対して、素材や構造の率直な表現を追求するニューブルータリズムという建築論を提唱したことでも知られる。そこで本研究では、スミッソンの建築作品を対象とし(3)、彼らの架構表現に着目することで、スミッソンの思想における建築と都市の対応関係を空間構成の特徴から明らかにすることを目的とする。

2. 架構材とヴォリューム形状からみた架構単位
2.1. 架構材の組合せ
建物を構成する柱や壁、屋根などの架構材は、それらが集合することによって空間的な単位を形成する。例えば分析例(図1)のWokingham Infants Schoolは、柱材による開放的な教室と、壁材による閉鎖的な廊下によって構成される。このようにスミッソンは、架構を単なる骨組みとして捉えるのではなく、周辺環境との関係性をつくる要素として捉えていたと考えられる。そこで、こうした空間の開放や閉鎖という視点から架構材により囲まれるヴォリュームの単位については整理すると(表1)、柱材のみ、壁材のみ、柱壁が混在するものがほぼ同数の作品でみられた。また垂直的な開放性を検討するために、屋根開口の有無についても整理した(表2)。

2.2. ヴォリューム形状
前節で検討した架構によるヴォリュームには特徴的な形状がみられる。例えば分析例(図1)の建物は、細長い廊下と正方形の教室から構成される。こうしたヴォリュームの形状について平面と断面の比率によって整理すると(表3)、平面・断面ともに正方の立方体(Ⅰ)が半数以上の作品に該当するとともに、多様な形状がみられた。また屋根などの外形の特徴に関しても整理した(表4)。

2.3. 架構単位
これまで検討した架構材の組合せとヴォリューム形状から、スミッソンの作品で繰り返し用いられている架構単位を整理した(表5)。まず、柱材による単位は、内部に架構材のないワンルームの立方体(ア)や、屋根の開口によって上部に開放され、ひだ状平面などの外形上の特徴がみられるもの(ウ)、細長い平面のもの(イ)などがみられた。次に、壁材による単位は、内部に柱材のないワンルームの立方体(エ)や、中庭をもつもの(オ)、屈曲した平面のもの(カ)など外部を囲むような形状がみられた。さらに、柱壁混在による単位は、細長い平面で屈曲する形状(キ)に集中した。

3. 架構単位の配列と周辺要素による構成類型
前章で得られた架構単位について、その配列と(表6)、既

Expression of Frameworks in Alison and Peter Smithson's Architectural Works
A Study on Alison and Peter Smithson Works (4)

Masaya FUKUDA  Akio YASUMORI
Kensuke SAHARA  Kazuya ONOMURA

日本建築学会大会学術講演梗概集
(東海) 2012年9月
倉庫や树木、地形などの特徴的な周辺要素（表7）との関係を検討した結果、同様の傾向をもつ7つの類型が得られた（表8）。類型①、②は柱材による架構単位が既存建物に増築された構成である。このうち①は屋根開口をもとにして、建築物をピロティによって地面と距離をとる細長平野の架構によるものである。しかし、③、④は壁材の架構を組み合わせ、③は柱材を含む建築物として、壁によって閉まれた屋根のない中庭状の架構が付加される構成、④は細長平野の架構が基壇上に外部を囲む構成である。⑤は壁材による複数の立方体の架構を既存建物が、柱材による通路状の架構によって接続される構成である。⑥、⑦は柱壁面の細長平野の架構によるもので、⑤、⑦は壁材の架構を基壇上に外部を囲むものである。⑤、⑥は基壇から連続して壁面を立ち上げ、枝分かれ状の外形を成すものである。

これらの類型間に共通する性格を整理すると（図2）、①、②、⑤は柱材による開放的な単位を既存部に付加する構成であり、③、④は壁材による架構を屋根の開口によって垂直的に開放するものである。これらは外部に対する開放と閉鎖を、既存部を含めた単位ごとに担う「開閉対比型」の構成であるといえる。特に、⑤は開放的な通路によって既存建物と新築建物を接続する、単位ごとの役割を明確にした構成である。これに対し、囲まれた外部空間を形成する④、壁面の柱組によって中間領域を単位内で形成する⑥、⑦、基壇と連続する⑥-2、柱材と連続する⑦は、建物の内部と外部の浸透を表現する「内外浸透型」の構成であるといえる。特に⑥-2は柱材による架構と、開閉機能の内部空間の双方の内外浸透の特性を併せもっており、さらに周辺の要素を伴うもので、建物の内部と外部の浸透を多重に表現したものであるといえる。

4. 結 
アリソン・アンド・ピーター・スミッソンの建築作品における架構表現を周辺環境との関係から検討した。その結果、既存部を含む周辺環境に対する開放と閉鎖を、架構単位ごとに表現するもの（開閉対比型）や、柱材や壁材を層状に重ねることで建物内外の浸透を表現するもの（内外浸透型）がみられた。このことからスミッソンは、架構単位の選択によって周辺環境との関係性をかたちづくっていたといえ、スミッソンの建築論と都市論の対応関係を空間構成の特徴から示すものと考えられる。

注1）安森義雄、福田充弘：「アリソン・アンド・ピーター・スミッソンの建築作品における周辺環境（内外浸透）」（1995）、日本建築学会大会学術講演概要集pp. 185-186、2010
注2）佐原謙介、福田充弘：「アリソン・アンド・ピーター・スミッソンの建築作品における周辺環境（内外浸透）」（1995）、日本建築学会大会学術講演概要集pp. 185-186、2010
注3）全作品集（The Charged Void Architecture [建築論]）、2001、Urbanism [都市論]、2003、Moorehouse, Alison and Peter Smithson, From the House of the Future to a House of Today (2004)、Itajjeri共同出版の図面や写真を資料として、インテリアやインスタレーション作品のぞく全建築作品（99作品）のうち、分析可能な63作品を対象とした。